

## 第40回 高橋記念賞

高橋記念賞は、故高橋愛次氏の功労を記念し、扶桑軽合金株式会社（現 株式会社アーレスティ）より寄贈された基金により、軽金属鋳物、ダイカスト、展伸材、二次合金および再生地金等の溶解・鋳造に関連する工業技術の進歩発展に功労のあった技能者に贈る。



菊地 恵二 君  
(日産自動車株式会社)

菊地恵二君は、1974年4月に日産自動車株式会社 栃木工場に入社以来43年間一貫してアルミニウム合金鋳造業務に従事し、その間アルミニウム合金シリンダヘッドの鋳造工程から仕上工程における品質向上、生産性向上に加え、1994年3月からの現場監督者としての18年間は鋳造現場人材育成にも尽力してきた。これまでの主な業績には、V6エンジンシリンダヘッド生産工場の立上げおよびライン運営の効率化（1991年～1999年）、L4エンジン薄肉シリンダヘッド生産ラインの立上げ（2001年～2006年）、鋳込作業の標準化レベル向上による加工材不良率の大幅な低減（2007年～2009年）等がある。2012年3月に鋳造課係長を退任、同年4月からは技術課に異動し技術員として活躍しているが、マレーシアEPA産業協力事業での現地指導（2013年）、塗型技術・技能レベルの向上（2014年～）等、これまでの現場での幅広い経験を活かし、シリンダヘッド粗材品質向上活動を牽引し大きな成果を発揮すると共に、後進の指導に尽力している。



藤枝 薫 君  
(株式会社UACJ)

藤枝 薫君は、1976年に住友軽金属工業株式会社（現 株式会社UACJ）に入社し、41年間一貫してアルミニウムのスラブおよびビレットの溶解・鋳造に関わる業務に従事した。1990年代には、小ロット多品種化が進む中で、現場作業の責任者として難鋳造材質の安定生産のための鋳造条件確立に携り、品質不良率を1%未満までに削減した。また、鋳造初期における安全面の向上においても大きな力を発揮した。2001年からは、現場監督者に就任して更なる多品種化が進む中で生産能力向上を中心に取り組んだ。多能工化による人員配置の最適化、段取り時間短縮による鋳込サイクル時間の短縮を実施し、生産能率の従来比約5%の向上を実現した。2011年からは、大型缶材の鋳造炉を担当した。ここでは異物混入の撲滅に尽力し、溶湯清浄度を向上させ、不具合の撲滅に大きく貢献した。2013年以降は、ビレット鋳造の全体監督者に就任した。これまでの多くの機械の担当経験を活かし、溶湯災害の危険低減を中心とした安全面、生産管理に携わった。現在は、鋳造工程はもとより板生産全工程における現場作業者の技術レベルアップのため、名古屋製造所における製板技塾の塾頭に就任し、若手作業員へ教育、技能の伝承に尽力している。



吉田 均 君  
(YKK AP株式会社)

吉田 均君は、1980年4月に吉田工業株式会社（現 YKK AP株式会社）に入社し、36年間一貫してアルミニウム合金の溶解鋳造業務に従事してきた。この間、押出加工用アルミニウムビレット製造における溶解・鋳造作業並びに品質に対し、作業方法および設備面から多数の改善に取り組み、特に、YKK APに導入してきたDCフロート鋳造・ホットトップ鋳造に対し、ビレットサイズおよび合金組成ごとの最適な鋳造条件を確立するなど、生産性および品質の向上に大きく貢献した。1997年に稼働した黒部製造所の鋳造工場の立ち上げでは、減容化材料の溶解炉投入、鋳造ビレットの吊上げ・搬送設備・内部割れ検査装置などの自動化、および省エネ燃焼機器の導入を推進し、品質、作業環境に配慮したライン構築に力を注いだ。現在は、その培われた豊富な経験を生かし、海外4拠点の溶解鋳造作業指導、定期設備診断および設備メンテナンスと国内4工場の溶解鋳造設備の導入支援に奔走し、また、QC活動およびTPM活動を通じた国内外後継者の指導・育成など、鋳造技能の伝承にも尽力している。